

編集発行・伊勢御遷宮委員会
伊勢市岩淵1-7-17(伊勢商工会議所内)
電話0596-25-5215

「伊勢 神話への旅」ホームページ
https://isesengu.jp

伊勢のごせんぐう



伊勢のたいせつな民俗行事「お木曳」、そして御遷宮を目標に
令和の「お木曳行事」もう準備は始まっています

キーワード「お木曳をうまく説明するための基礎知識」
ほうえい
伊勢のローカル用語だった
伊勢の民俗行事を説明する上で、よく使われる一般的な言葉ではない言葉といえます。「奉曳」ではないでしょうか。インターネットで「奉曳」と検索すると、ほとんど伊勢のお木曳に関することです。初めての方には「ほうえい」という言葉の音だけでは伝わらないかもしれません。
奉曳とは、伊勢の民俗行事において伝統的な櫓や車を曳いて神宮に奉納することを意味します。内宮領の場合は、川の中を櫓に載せて奉曳し、外宮領の場合は、専用の車（お祭りという山車）を奉曳車と呼び、櫓・奉曳車を綱を付け、大勢の人力で曳き歩くことを奉曳といえます。
伊勢市内には、お木曳が近づくと各地域の伝統や区分けにより奉曳団が結成され、住民が団員になります。ご遷宮の社殿の造営に使われる御用材を載せて「決められた奉曳日に奉曳団ごとに奉曳する」ということとなります。
曳くという字を「えい」と音読みするわけですが、お木曳だと「ひき」と訓読みで濁らないのに「川曳」「陸曳」は「びき」となる。これが初心者にはなかなか難しいようです。全国からのお客様を迎えることも多い自慢の民俗行事、うまく説明したいですね。

「奉曳」って…



陸曳 / 小俣町奉曳団明野分団 (筋向橋周辺)
※写真は第62回神宮式年遷宮お木曳行事「奉曳」の様子 / 平成18年



陸曳 / 「太一」の札が付いた神宮の奉曳車 (外宮北御門)



川曳 / 二見町江清渚連 (五十鈴川)

式年遷宮は、天下泰平のもとで

●ごせんぐう千三百年の歴史から
神宮の式年遷宮は第41代 持統天皇の時代にはじめられ、平成25年の御遷宮で第62回を数えました。式年とは定期的な、という意味合いで、それが20年に一度とされていることはよく知られていますが、それはこの国において社会的に「何事も阻むものがない」状況にあったこと。
過去には様々な事情から御遷宮が式年通りに行われなかったこともあり。最も近い例では、昭和の第二次世界大戦の影響で、昭和24年に実施予定であった第59回神宮式年遷宮は、4年延期され昭和28年に実施。それ以後60〜62回の3回に關しては「幸いにも」20年に一度の実施が叶った、といえるのかもしれませんが、長い歴史の中では1300年ほど遷宮が途絶えた時期がありました。それは1467年の応仁の乱以後のいわゆる戦国時代。式年遷宮を行うことができず止むなく仮の御殿が造られた時期もありました。織田信長が乱世を治め、その後は幕府の経済的な支えが安定し、式年遷宮による造替の仕組みが現代に伝えられることとなったのです。
御遷宮の準備は一つ一つの諸祭行事を重ねられて進みます。ご造営は約8年の歳月をかけます。戦乱の世、というのは現代の日本では考えにくいですが、昨今のパンデミック、懸念される自然災害等、社会基盤を揺るがす事態が起こる可能性がないとはいえませんが、平和な世が続くことを祈りながら、無事に生きて御遷宮の年を迎えられるように、それはいつの時代も伊勢の人々の人生の目標になっていたことでしょう。

伊勢御遷宮委員会では、この広報紙「伊勢のごせんぐう」で、先人たちにより継承されてきたこれまでの御遷宮の「お木曳行事」等の様子を振り返り、ご紹介してまいりました。
次号からは、次期御遷宮の「お木曳行事」をはじめ御遷宮行事への市民参加を目指し、より多くの伊勢市民の皆さんにご理解いただけるよう情報を発信してまいります。
※一連の行事は前例を反映した予定です。また、社会情勢等により変動する場合があります。



御遷宮関連行事 年表

カラーで見る昔のお木曳特集
伊勢らしい町並の間に停められた42本を積載したという小川町の奉曳車。横には尾上町の奉曳車が到着。小川町と対比するように、櫓付で飾りがついた車に揃いの白い着物とカンカン帽の男衆が曳手として並び、奉曳団によって様々な特徴、個性があることがよくわかります。
(奉曳コース：二俣町廻り)

「お木曳行事」は、御遷宮の御用材を運ぶ役割が祭礼化した、神宮に寄り添う伊勢のまちならではの貴重な民俗行事です。平成18・19年に行われた前回の小川町お木曳行事は参加者のべ20万人という規模で、現代でも伊勢市全域を対象に行う一大行事。伊勢市民であっても人生のうち何度もできない経験です。
市内の町や地区ごとに奉曳団が結成され、全団が連合して用材奉曳本部となり実施します。令和4年、未だコロナ禍により先の見えない中ですが、数年後に控えたお木曳行事に向かって既に準備を始めている地域も増えてきました。それぞれの時代の課題を乗り越えながら、先人が伝えてきた歴史ある民俗行事を途絶えさせないよう心にとめておきたいものです。